

三宅藤兵衛

非道の番代か慈悲の番代か

三宅藤兵衛

三宅藤兵衛は明智光秀の外孫にして 光秀の子の細川ガラシヤに育てられたともいう

ガラシヤは熱心なキリシタン そのため藤兵衛もキリシタンであったともいう

変遷を経て 唐津藩主寺沢氏に見込まれ唐津藩へ仕官

そして天草富岡城の七代目番代に就任 石高は三千石いや一万五千石

藤兵衛 心ならず キリシタンを棄て？ 一転弾圧の側に

藤兵衛番代の時 勃発した天草島原一揆

富岡城へ向けて進軍する一揆軍 これに立ち向かう唐津藩兵

藤兵衛先頭に立ち本戸で迎え撃つも 勢いと数に勝る一揆軍の前に逢えなく戦死

嗚呼悲しきかな中間管理職

藤兵衛の波乱万丈たる人生も 討ち死にした本渡広瀬にやつと安息するか

後世の人曰く

藤兵衛は過酷にキリシタンを弾圧した非道の番代、いや慈悲の人であったと。

果たして、真実やいかに

三宅藤兵衛とは

天草島原の乱当時、天草は肥前唐津藩寺沢氏の領地（飛領）であった。

天草は天正の天草合戦以来、キリシタンであった小西行長の領地になったが、行長が、天下分け目の戦いと称される関ヶ原の戦いで敗れた後、家康から寺沢広高に、関ヶ原の戦功として与えられた。

広高は、袋村あるいは留岡と呼ばれていた富岡に新城を築き、天草統治の拠点とした。富岡城には番代を置いた。

三宅藤兵衛の就任は元和元年（1621）。七代目の番代であった。番代とは、唐津本藩の筆頭家老級のもので、兵事治安関係の長官的な役割を持っていたという。

三宅藤兵衛は、乱当時の天草番代（七代目）であった。赴任は乱発生の15年前である。寺沢広高が富岡番代を最初に置いたのが慶長八年（1603）であるから、歴代番代の在職期間は平均3年である。藤兵衛の15年が長いという事が分かる。

というより、恐らく堅高は、藤兵衛を富岡終身番代とするつもりであった様だ。というのは。

① 天草という本藩から離れた地に、行きたがる人がいな



かったこと。

② 藤兵衛を高く評価していた堅高は、安心して、天草統治を任すことが出来た。

などが考えられる。

もし、乱が起きず、寺沢支配が続いていたら、藤兵衛の後は、嫡男の藤右衛門が番代を引き継いだかもしれない。

そうなれば、事実上、天草の支配者は、三宅家が担うことになった。

藤兵衛の知行は、天草近代年譜では千石としているが、本渡市史によると、自身の禄高が三千五百石、与力高が七千石、合計一万五百とも言われ諸説あるようだ。その知行地は佐伊津村、広瀬村、下河内村、本村などであった。この三村の村高は、石高は正後のことであるが、千百石余である。もし、この三村で三千石というのであれば、相当な酷税が課せられていたことになる。乱の一因とも言われる酷税を表しているのかもしれない。

三宅藤兵衛は明智光秀の孫

三宅藤兵衛は、明智光秀の姉の子である明智左馬之助と明智光秀の次女との間に生まれた。幼名を与平治といった。

藤兵衛は通称で、正式な名は、重利である。

藤兵衛は明智光秀の外孫にあたり、熊本藩主細川忠利とは従兄弟の関係にある。また肥後細川家の二代忠興の妻である細川ガラシヤの甥に当たり、ガラシヤに育てられたともいう。ガラシヤは熱心なキリシタン。藤兵衛もガラシヤの影響でキリシタンの洗礼を受けたといわれている。

後の藤兵衛について棄教者という表現が見られるが、藤兵衛自身、キリシタンとして、どれだけ信仰心があったのか分からない。

三宅藤兵衛の確たる伝記はないようだが、『天草史談・第6』に掲載されている「源姓三宅氏中興家伝」によると。

まず、藤兵衛の祖父重時は、次のように記している。

重時

出雲守と称す。妻は明智日向守光秀の姉なり。先祖から濃州に居たが、重時になって、初めて丹後国亀山に移り住む。

天正十年六月十四日。豊臣秀吉によってほぼ滅亡させられたため、家譜などごとく無くしたため、祖先の事績は不明となる。

左馬之助

藤兵衛の父である。母は明智光秀の姉。したがって光慶は、光秀の甥に当る。

本能寺の変時、光秀の居城「坂本城」を守っていた左馬之助も自裁する。時に僅か26歳という。

(註) 藤兵衛の父、明智左馬之助は、「光慶」「光春」「秀満」「光遠」「秀俊」「光昌」など様々な名前がある。ここでは通称の「左馬之助」を用いる。

藤兵衛

父光慶自裁の時、僅か2歳。家臣三宅六郎これを懐に抱いて京師に逃れる。12歳になり、ひそかに隠れて鞍馬の僧舎に在り。細川越中守忠興公の室秀林院殿、叔母という事で、公にして藤兵衛を召す。丹後にで厚く恩顧を受けること数年、一旦訳有りて、京師紀州の際に流落する。故左馬之助の家臣安田作兵衛が光慶敗亡後、肥前唐津の城主寺沢広高に仕え、姓名を改めて天野源右衛門と称する。この天野、広高に請うて藤兵衛を招く。広高藤兵衛に采地三千五百石を授ける。

この家伝書は、文体が若干難しいので読みづらい。そこで、『上天草市史 大矢野編3』に書かれている「三宅藤兵衛」を転載する。

三宅藤兵衛の幼名は師、父は明智光秀の家老明智左馬介(弥平次・光慶とも)、母は明智光秀の娘(多分「お藤」といったか)、細川忠興室玉(ガラシャ・秀林院)の姉である。

天正十年六月、本能寺の変のとき二歳であった。当時、光秀の城は丹波亀山城と近江の坂本城の二つがあったが、光秀の奥方や娘たちも坂本城にいた。六月十三日、光秀が小栗栖おぐらすで土民に殺されたのち、坂本城も秀吉軍に攻められた。落城にあたり、父左馬介は姥うばに藤兵衛を抱かせて落ちのびさせた。

左馬助知り合いの京都の町人、大文字屋が育てていたが、世も静かになつてから十三歳になつた藤兵衛を伏見の忠興の屋敷に伴つたところ、大変驚かれて高野山に上せられ、名を師様と申し上げた。折々伏見にも見えられて、秀林院(伯母玉)にもお目にかかり、折々手紙も頂いた。十九歳のとき、世も静かになつたので忠興から秀吉にその旨を申し上げたところ、苦しがる間敷由、忠興に与えるのことで、名を三宅与助と改め三百石を遣わされた。暫く細川家にいたが、折節おりかた左馬助の家老天野源右衛門が唐津寺澤家にいたので同藩に三百石で仕えることになつた。その後、段々の御加増で三千石に進み、天草の押さえとして番代にとりたてられ、嫡子藤右衛門も御

番頭を仰せつけられ、三男加右衛門にも別知千石を賜った。(藤兵衛の家司、吉浦兵右衛門の孫である郷右衛門が父諸兵衛から聞いて書いて書いた覚書の要約)

※藤兵衛の母は玉の姉であるため、叔母が正しい

ほぼ内容は同じだが、藤兵衛の誕生年月日も不明であるように、富岡城番代になるまでは、詳しいことは殆ど分かっていないということである。

当兵衛が、何時から寺沢氏に抱えられたかも不明のようである。

『寺沢藩士による 天草一揆書上』によると、元和二年(1616)には、吉井村(現福岡県糸島市)・天草郡の内六〇〇石としている。したがって、元和二年には、寺沢藩士となっていたとみていい。

その後は、元和五年(1619)は鹿家村(現福岡県糸島市)・天草郡の内七〇〇石。現在の天草市佐伊津町、本町、本渡町広瀬及び蔵米で三五〇〇石を得ている。

キリシタンを弾圧

藤兵衛は、番代としてというより、唐津藩士として、殿様の指図にNOという事は出来ない。藤兵衛がもし、キリ

シタンに対して同情的であったとしても、殿の意向によって、意に反することも執行する必要がある。

藤兵衛がはたしてキリシタンに対して、どういう感情を持っていたのか、分らないが、少なくとも当初は、キリシタンに対して同情的であったことは間違いない。というより、藤兵衛自身が、キリシタンでもあった。

寺沢氏も、堅高はともかく、先代の広高は、キリシタンに寛容であったと言われる。それが、キリシタン弾圧に向かったのは、幕府の方針に従わざるを得なかったためである。

そこで、一般的に、キリシタンを過酷な拷問などで弾圧したとされている、藤兵衛のキリシタン対策の真実はどうであったのだろうか。

キリシタンを弾圧

『日本切支丹宗門史』レオン・パジェス著 吉田小五郎訳 には、

藤兵衛のキリシタン弾圧の様子を次のように記している。

天草の領主寺沢志摩守は、志岐の代官兼群島の奉行として、棄教者で、かつ熱烈な迫害者たる三宅藤兵衛を選

んだ。藤兵衛は、「代官」即ち支配役に、百姓を強制的に棄教させよと命じた。最初の厳命は、奉行の所在地富岡の城を含む志岐で実施された。

最初、家長たちが簡単な言葉と威嚇とで攻撃を受けた。ある者は下ったが、また他の者は頑として動じなかった。婦女子が監禁され、しかもその数は、間もなく213人になった。

その夫たちは、監禁されている妻の許に、貧弱な食物を少しばかり運んでやらねばならなかった。されば、この哀れな人々は、煩惱のパンと苦悶の水で生きていたと言える。この最初の試練は、七日間続いたが、誰一人死ななかつた。藤兵衛は、陽のよく当たる畠のなかに、竹で編んだ一種の小屋を建てた。その圍内は誠に低く、立てられないので、跪き通しでいなければならなかった。この小屋の内は、棘でいっぱいであった。

妻と乳飲み子とは、別々に監禁された。日に一回だけ、囚徒の父や夫が、食物を運んで行くことが出来るのであった。78日の間、このままでいた。妻や子供が、夫の前で拷問を受けた。大勢の家長が次々と転んだ。かくて彼らが棄教すると、心配なしに妻や子供が返された。

しかし、色々立派な例があった。その中には、キリシタン達の頭で富岡の奉行の一人、トマス・ヨザエモンの如きがそれであった。彼の妻と子供のドミンゴは監禁さ

れた。トマスは、この試練で少しも弱らなかつた。しかも彼は毎日家族の許に食物を運んで来ては艱難に耐えよ、時によつては死にさえ耐えよと激励した。藤兵衛は、敢えてトマスを殺さず、息子を追放し、妻には邸内に於ける謹慎者の番を命じた。

ジュリオという82歳の一老人、彼は近江の生まれで、元イエズス会の同宿であつたが、八月の初めから十一月二十九日まで虐められた挙句、天草の領主の直々の命令によつて、首に大きな石をつけて海中に投じられ、溺死させられた。他の犠牲者たちも、同じ刑を宣告された。

(以下略)

これらは、被害者側から見たものであり、かつ著者が直接見たわけではないので、割り引いてみる必要がある。また、ここに書かれている拷問全てが、藤兵衛によつてなされたとは言えない。

この事に対して、『島原の乱』助野健太郎著 は、藤兵衛のキリシタン対策について書いているので、要約して紹介する。ただし、内容は前出の『日本宗門史』によつてゐる。

寛永二年(1925) 寺沢広高が63歳を以て隠居し、嗣

子兵庫守堅高が17歳で家督を継いだ。寛永五年將軍家光は、重ねてキリシタン弾圧を触れを出した。

(唐津の本藩へキリシタン弾圧のため帰藩した籐兵衛は一年間滞留したのち)翌寛永六年、富岡に帰任した籐兵衛の形相はまるで変わっていた。血に飢えた悪鬼の如く、キリシタンとみれば容赦なく捕え、拷問にかけた。

弾圧の山口としては、最初簡単な言葉と威嚇で、家長たちを攻撃した。それでも、転ばぬ(棄教)ものは、次に婦女子が監禁された。その数213人にも及んだ。その婦女子に食事を運ぶのは夫の役目であった。食事の量は勿論わずかしか与えることは許されなかった。それでも、転ばぬ者には、夫の目の前で、妻や子供を拷問した。また、老人たちは、首に大石を付けて海に沈めたりされた。

三宅籐兵衛は慈悲の番代であった？

三宅籐兵衛は、悪鬼のごとくキリシタンを弾圧したという説に対し、反論を唱える小説がある。「天草の乱秘聞―富岡城に立つ虹」 村上史郎著 熊日出版 だ。

この本は、三宅籐兵衛を主人公に、天草島原の乱の初戦となる、天草での戦いを描いた小説だ。

氏は、あとがきでこの小説を書こうと思いついた動機を

「三宅籐兵衛という男、そのような悪逆非道の人物と単純にいえなければかりか、むしろ逆に、領民への深い慈悲の心を持ち、キリシタンにも相応の理解を示し得る奥行き深い人物であったに違いない、というのが、本書の執筆を思い立った時の私の直感であった。」と書いておられる。

先の助野氏の説と村上氏の説は、両極端だが、どちらが本当かを考えながらこの小説を読むのもいいだろう。

また、司馬遼太郎は、「街道をゆく―島原・天草の諸道」で、「富岡城代三宅籐兵衛がどういう人物であったかは、よくわからない。しかし、記録や伝承に散見する松倉氏の家老たちのような印象の人物ではなかったように思われる。」と書いている。

天草の乱緒戦であえなく討ち死に

三宅籐兵衛が富岡番代になって16年後に、天草一揆の大乱が起きた。籐兵衛にとって、晴天の霹靂であったかもしれない。

まず乱は、島原から発生した。それに呼応して、天草でも時を置かず、一揆勢が蜂起した。

番代として、籐兵衛はどのような行動を取ったのであるか。

藤兵衛の行動を、時系列的に記してみよう。(資料・『寺沢藩士による天草一揆書上』より)

寛永十四年十月

二四日 ・湯島談合。

二五日 ・南有馬で代官林平右衛門が殺害され、乱が起きる。

二七日 ・大矢野、上津浦で一揆の火の手が上がる。

二八日 ・熊本藩家老から三宅藤兵衛に事態の問い合わせがある。

二九日 ・藤兵衛からの一揆発生の第一報が唐津に届く。
・三宅藤兵衛、天草新介等が本戸に出張する。

・藤兵衛、大矢野他数村で、キリシタン立ち返りが起きていることを熊本藩家老に通報する。

・須子村で細川立充から三宅藤兵衛への使者が百姓たち50人程に通路を塞がれる。

三十日 ・天草からの援軍要請が唐津に届く。

十一月

一日 ・三宅藤兵衛・三宅新兵衛、組侍を連れて志柿に出張る。

・三宅藤兵衛、一揆勢が大矢野に400、上津

浦に500人いることを熊本藩に通報する。

三日 ・三宅藤兵衛、三宅新兵衛、天草新介等連れ、大島子へ出張る。

四日 ・三宅藤兵衛、唐津から近日中に援軍が来るため、お気遣い無用事と、熊本藩に伝える。

六日 ・天草新介、百姓鉄砲10挺、外30人を召し連れ、百姓惣兵衛に上津浦の様子を探らせる。

・天草新介、藤兵衛に一揆討伐を建議するも、藤兵衛寡兵の理由で応じず。

七日 ・三宅藤兵衛、一揆について豊後目付の牧野伝蔵・林田丹波守に報告する。

八日 ・三宅藤兵衛、大島子から富岡へ帰る。
十日 ・三宅藤兵衛、熊本へ、重ねて豊後への使者へ添使を依頼する。

・唐津からの援軍500が、やつとこの夜富岡に着く。

十一日 ・唐津勢、本戸に出張る。

十三日 ・四郎、高来勢を率いて上津浦に至る。
・夜、三宅藤右衛門組が大島子に着陣する。

十四日 ・島子・本戸戦が起きる。

一揆勢は天草勢1600、島原加勢2000。
・三宅藤兵衛、町山口の崩れ橋で馬に乗り離れ、茂木根に向かう途中で討ち死に。首は町山口

の浜にかけられる。

本戸で敗れた唐津勢が富岡へ引き上げる。

天草の一揆勢は、大矢野島から上津浦へ進出して、下島を勢力下に収めつつあった。藤兵衛は、天草の中心本渡が危険に瀕するのを見てたまらず、唐津の援兵を待ち切れず、自ら城（富岡城）を出て、本渡まで兵を進めた。やがて、唐津から到着した援軍もふくめ、勢力は1500人。一方の一揆勢は、5000人。

まず、島子で鬨いの火ぶたは切られた。島子の戦いでは、一揆勢が圧倒的勝利を収め、藩兵は三宅藤兵衛が指揮する本渡の陣に迫った。

本戸でも、一揆勢の猛攻は止まらず、さしものプロ集団の唐津軍も、押されるばかりか、一部では逃げ出す一隊もあった。今やこれまでと決めた藤兵衛は、やにわに単騎敵中に突入して勇戦奮闘したが、遂に深傷を負い、終に割腹して果てた。

緒戦で、唐津勢が敗れた原因として、筆者が考えるに。

① 最後の戦い、大坂の陣が終わってから22年が過ぎている。戦いの経験がない者が多かった。

② 一揆勢をたかが百姓と侮っていた。

③ 富岡城の兵が少なく、かつ援軍が遅れた。

④ 熊本藩からの援軍が幕府の方により得られなかった。等であろうか。

藤兵衛自身も、大坂の陣の時34歳であったが、この戦いには恐らく参戦していないだろう。つまり、実戦の経験がなかった。また、よそ者で高禄を食む藤兵衛は、唐津藩士から嫌われていたという説もある。

とにかく、藤兵衛にとっては、この一揆勢との戦いは、かつての戦国武士のように、名を上げ知行を上げる為の戦いではなく、至極迷惑な戦いであったと思われる。

ただ藤兵衛は、武士として、戦って戦場で死んだのだから、それなりに本望だと思いが、ただ戦った相手が、百姓勢であったは、不本意であったと思う。

藤兵衛の子孫は、それぞれ名家を持ち、それなりに厚遇を受けているようである。

「四郎乱物語」から

本戸合戦 三宅藤兵衛打死の事

一、三宅藤兵衛、岡嶋二郎左衛門は五百よきにて本戸の陣をかため、諸方の便りを相待つ処、四郎上津浦より多

勢打ち出で、大嶋子の合戦黒煙を立て、海上には数百の舟共透間なく相見え、味方勝利を得難き旨、先連て聞こえければ、原田伊予、沢本七郎兵衛亀川に陣を張つて有りしが、ちりぢりに居てはあしかるべし一所にて防ぐべしと、六百よき町山口村の下に陣をひかせけり。

瀬戸の潮もいまだひききれざるところ、大嶋子敗軍の勢ども、下瀬戸をかけ渡り、味方の陣に相加わり、以上二千五百騎なりければ、本戸、今釜、小松原、町山口村の下まで、透間なく備えを構えて、よせ来る敵を待ちかくる。

キリシタンの勢どもは、勝に乗じて在家に火をつけ、敗北の後を追ひ、先手瀬戸の磯に出ずれば、後陣はいまだ志柿村に充滿す。

四郎暫らく瀬戸の浜辺に居て、惣勢を待ち揃え、潮ももはや千落ちければ、時分はよきぞか、れやもの共と下知をなす。キリシタン共いさみすゝんで一度にどつとおり立ち、おのが宗旨の唱えをときの声に作りかけ、しずしずと相近づく。味方も一度に渦中におり立ちて、同じくときをあわせけり。両陣の軍勢白洲の立ち合い、一里四方の遠入干潟隙間なく見えけり。

藤兵衛ざいをふり、鉄砲うてと下知をなす。並河太左衛門、値賀孫衛門、一陣にすゝみ出で、備え置きたる六十挺の鉄砲、はたはたと放しかくる。キリシタン共も鉄

砲を打ちあわせ、しばし鉄砲軍したりしに、両方共にうたるゝもの多かりけり。原田伊予鎗を入れよとよばわり、自身も打つて出でしかども、岡嶋二郎左衛門、沢木七郎兵衛、三宅正之介、轡をならべて打つて入る。佐々小左衛門は六尺ゆたかの大男、あかねの大袈羅かけたれば、諸士にすぐれて見えけるが、真先にすゝみ逃ぐる敵を追いかけて、深入りして後をきられ主従二十九人一枕に打死す。続いて関右京も打つて出でしが敵大勢にとりまかれ、ようようと追払い、疵を負い、味方の陣に引いて入る。

今井十兵衛、佃八郎兵衛、河崎伊右衛門、平山平太夫四人は敵あまた打ち取り、一足もひかず打死す。三宅藤右衛門、同舎弟新兵衛、関善左衛門は先の恥辱をすゝがんと、小松原より打つて出で、大勢の中に割つて入る。

九里吉右衛門、古橋庄介、呼子平右衛門、田代八右衛門、河副市右衛門、同伝七郎、同茂左衛門、陰山仁右衛門、草場藤九郎各々馬上に甲冑を帶し、鎗打ち物を以て相働く、敵は皆すはだ歩立ちにて、面もふらずたゝかうといえども、竹やり交りの道具なれば、馬上武者にかけ立てられ、少し引き色に見えけるところに、敵方の鉄砲の上手数多亀川より本道へ廻り、大田口十五社山の森下より、はたはたはたと打懸くる。此の矢にあたりて死するもの多く、馬にもあたり、銘々も疵を蒙むりければ、敵に前後を切られてはあしかるべきと、味方の陣にさつとひけ

ば、雑兵共これを見て我先にと敗北す。

三宅藤兵衛陣中をかけ廻り引くな引くなと下知すれ共、なびき立ちたる大勢なれば、ふみ留まるものもなく、浜の手は小松原、今釜より中村さして引くもあり、山の手は町村より山口へかけ上がり、かけ道に出ずるもあり、中道は町村のはずれ舟ぼしと言う大橋中ば落ちたるを、しらず馬をのりかけ、かえさんとすれば敗軍の勢さゝえ、為すかたなく水中に乗り落し、馬をいため、歩立になる武士もあり、衣類兵具をぬらし、こゝえてあがる武士もあり、今は一所につぼむべきようもなく、散々になりけり。

なおも三宅藤兵衛は、千騎が一騎に成るまでもと、陣中をかけ廻われ共、手付きのものも落ち失せ、主従六騎になりければ、これより馬を海中に乗り入れ、茂木根崎の沖に置きたる舟にのらんと急ぐところに、船は渦中にほしすえ、人一人もあらざれば、南無三ぼうと取つてかえし、広瀬をさして落ちて行く。桑浦久作、瀬戸吉蔵此所にてうたれけり。

藤兵衛は塩浜の塘に馬をかけ上ぐれば、敵の打つ鉄砲、馬の大腹にあたり、尻いにどうと伏しければ、藤兵衛歩立に成りて、山川次兵衛を供として、一丁ばかりはあゆみけれども、老武者のかなしき軍には仕つかれたし、重き具足にひかれ今は一足もかなわず、天神の前の稲田の

畔に腰をかけ、次兵衛に首をうてと言う。吉浦兵右衛門は、土手を構えに取つて、追い来る敵を四、五人突き伏せ、一足もさらず打死す。山本五郎兵衛は兵右衛門と一所にて、深手を負い、手鎧引つさげ、藤兵衛もとへ来る。次兵衛見て御生害とのたもうなり。いかゞ仕るべきやといえ、日本一の御最後所、急ぎたまえと諫をなし、たじたじとして通りしかば、藤兵衛は積年七十三(注)、腹切つて其の名を天下にあらわしたり。

五郎兵衛は猶も人手にはかゝらじと、広瀬村の山なる森のかげにかくれ、腹を切るべき覚悟せり、次兵衛は主人のとどめをさし、その首をひつさげ、広瀬村へと落ちけれども、あまりつよく大勢にて追いかくれば、主人の首を深田の泥の中に押し込み、在家に逃げ入り、身をかくしてぞのがれけり。

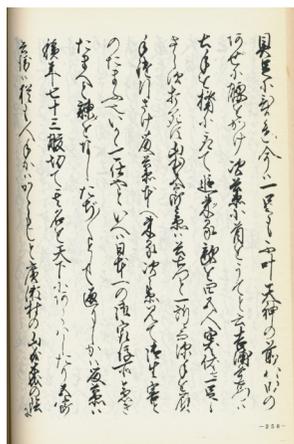
追手ども、五郎兵衛後より、のりをつたいさがし出して打ち果す。その戻りに藤兵衛首をさがしとり、大勢あつまり、勝どきをどつとあげ、その日の軍は止みにけり。日も暮れければ、敵の大勢は本戸馬場村に陣取つて休みける。

以下略

(注) 七十三は間違いで五十三が正。

三宅藤兵衛最後のシーンが生き生きと描かれているので、

長文だがここに掲載した。



「四郎乱物語」 著者不明

復刻版の読解版(亀井勇天草切支丹館長)

1973・10・1印刷

本渡市立天草切支丹館振興会発行 より

本渡町広瀬の三宅籐兵衛の墓

自刃したとされる藤兵衛の首(遺体)は、どうなったのだろうか。

藤兵衛の墓に設置されている天草市の説明板には、「山田の庵主が遺骸を埋めた」と記されている。

『上天草市史 大矢野町編3』には、「藤兵衛の首は、介添えをした山本五郎兵衛が田の中に押し込んでおいたが、のち一揆の者が探し出し、本戸の浜に晒し首にした」「その後伊津の庄屋右衛門が貰い受け、広瀬の高台に埋めたのが、現存の三宅藤兵衛の墓である。」と記している。

果たして、どちらが真実か、どちらも間違いか、真実は分からない。

本渡町広瀬の三宅籐兵衛の墓の説明文

慶長八年天草は肥前(佐賀)唐津寺沢藩の飛地となり始めて富岡に城を築き番代が置かれた、三宅藤兵衛はその七代目の番代である。寛永十四年天草の乱勃発、藤兵衛も自ら兵を率いて本戸にこれを迎えた、寄せ手に天草四郎を盟主とするキリシ

タン勢、生死を恐れぬ宗徒の前にさすがの勇将藤兵衛とその手兵も遂に全滅の憂き目にあい自らも広瀬の泥田に憤死した時に五十七歳、山仁田の庵主遺骸をこの地に埋めてねんごろに吊ったという。

天草市

天草市観光協会

三宅藤兵衛の墓は、P3。

藤兵衛の墓の横にある、

藤兵衛と共に討ち死にした唐津武士の墓

下写真左から、瀬戸吉蔵、山本五郎兵衛、吉浦平右衛門、神浦久作の墓。

後述の「青木秀穂」氏の講演によると、瀬戸吉蔵は草履取りとしている。それにしても、草履取りの吉蔵のの墓石が一番大きい。また神浦久作は桑原久作としている。



苓北町富岡瑞林寺の三宅藤兵衛の墓

以外に知られていないと思えるが、苓北町富岡の瑞林寺も三宅藤兵衛の墓がある。この墓は、新建でなく、明治に再建されたと思われる。その横には、古い墓もあったように記憶しているが、現在は存在していない。刻字を見ると。



右 富岡城代三宅藤兵衛重利寛永十四丁

戊年十一月十四日於広瀬村戦死

正面 龍徳殿雪山道白居士

左 明治四十丁未三月

城木場村松山千太郎建立

裏 一金 飽託郡本庄村

三宅 重雄

建立者の城木場村、松山千太郎氏は、初代藤兵衛に養育された、松山儀右衛門貞重の九代に当たるといふ。

「三宅氏の遺臣松山家系」によると、この松山貞重は次のように記してある。

初代貞重

松山儀右衛門と号す。その父祖松山外記は鹿児島阿久根の生まれ。後肥前国南高来郡有馬左衛門佐藤原直純公に仕えしが、元和九年貞重二歳の時病没する。

時しも同年島原城主左衛門尉も、日向国高鍋城主に国替えの事あり。貞重未だ幼少の故に御伴なり難く、縁ありて肥前国天草郡富岡城代三宅藤兵衛に引き取られ、直ちに役所に召し置かれる。母もその際、富岡町年寄田中半右衛門へ縁付けられ、貞重のみもつばら藤兵衛の養育により成長する。

寛永十四年の暮秋、彼17歳の時にかの天草の乱起り、そのため急遽宮と藤兵衛の出陣を見るや彼もまた城代の子息共々本戸村山仁田まで罷りこす。後城代の命のまま子息諸共富岡城内へ立ち帰り、急ぎ城中の固め致し居るところ

に、三宅藤兵衛遂に広瀬村にて討ち死にの悲報に接せりという。

乱後、藤兵衛の子息藤右衛門は、細川光尚の招きに応じて仕官するが、貞重は暇を乞うて随伴せず、城木場に移住した。以後貞重の子孫は、代々天草の地で暮らし、藤兵衛の墓の建主、千太郎は九世にして、文久二年生まれ。大正十二年歿。

(「天草史談 2・3号」より)

寄付者の三宅重雄氏は、三宅藤兵衛の直系で、十一代に当たる。

三宅氏系図 続き

藤兵衛 子

長子 重元 藤右衛門

肥前唐津城主 広高に仕える。

広高卒後、堅高に仕える。

寛永十四年、天草の乱に付き、天草に至る。この時広高江戸に在る。重元、留守の人馬を率いて天草に至る。父重利（藤兵衛）もまた本戸に出て一揆軍と戦う。一揆勢の勢い甚だ盛んにして、重利之に死す。

重元、弟重信（徳助）、重行（新兵衛）と共に、富岡城へ帰る。重元殿を勤め、一揆勢これを追撃できず。

その後、一揆勢富岡城を攻める。甚だ急なことであった。この攻撃で一揆勢が放った鳥銃が、重元の喉付近を傷つける。重元これに屈せず。

一揆勢は、富岡城攻略をあきらめ、島原に移る。重元衆もこれを追って有馬に至る。

翌年、二月二十一日、一揆勢は秘かに城を出て、寺沢の囲みを破らんとする。重元、諸士に先んじて奮闘するも傷を負う。この時、多くの部下が多く戦死する。一揆勢も多数死傷する。この戦いで重元最大の戦功有り。

寛永十九年、故あって唐津を去り、筑前瀬高に移住する。寛永二十年、細川光尚の招きにより、肥後の高瀬に来る。正保二年、知行千五百石を賜る。

数年後、命あって、八代城を鑑す。光尚の手書きに曰く。重元、老いて致仕を願う。綱利はこれを許し、その禄を嫡子重次に与え、別に三百石を重元に与え、労病の養育料とする。

寛文六年十一月十八日死去。享年63歳。

二子 重信 吉田庄之助

重元と同じく肥後に来る。若くして卒。その子重清は、10歳にして月棒十口を賜る。その後三百石となり、砲手の名人となる。

三子 重豊 （加右衛門）
唐津城主に仕える。

四子 重行 （新兵衛）
別家を起こす。

父藤兵衛や兄弟たちと共に、一揆軍と戦う。
寛永十九年、故あって唐津を去る。

正保二年、細川光尚に仕え、采地七百石を賜る。

綱利の時代、砲手50人の長となる。後、番頭となり、寛文五年十一月十日病死。泰陽寺に葬られる。

三宅藤兵衛 関係年譜 (『天草近代年譜』等より)

天正 九年(1581) 三宅藤兵衛生まれる。父は明智左馬之助。母は明智光秀の娘。幼名師、与平次。

天正 十年(1582) 六月二日、明智光秀信長を討つ(本能寺の変)

六月十三日、明智光秀、討たれる。

本能寺の変後、藤兵衛は、家臣の三宅六郎太夫(あるいは姥)に抱かれて京都に逃れ、父の知り合いである町人・大文字屋のもとで育った。12歳で鞍馬寺に入るも、翌年には叔母の細川ガラシャ(秀林院)を頼って細川氏領国の丹後に移り、以後細川家の庇護を受けた(のち三宅与助と名を改め、三百石を遣わされた)。

のちに細川家を辞去し、父・明智左馬之助の元家臣であった天野源右衛門(安田国継(安田作兵衛)が改名)の縁により三百石で唐津藩(寺沢家)初代藩主の寺沢広高に仕えた。(この項ウイキペディアより)

父左馬之助自裁の時、僅か2歳。家臣三宅六郎これを懐に抱いて京師に逃れる。12歳になり、ひそかに隠れて鞍馬の僧舎に在り。細川越中守忠興公の室秀林院殿、叔母という事で、公にして藤兵衛を召す。丹後にで厚く恩顧を受けること数年、一旦訳有りて、京師紀州の際に流落する。故左馬之助の家臣安田作兵衛が左馬之助敗亡後、肥前唐津の城主寺沢広高に仕え、姓名を改めて天野源右衛門と称する。この天野、広高に請うて藤兵衛を招く。広高、藤兵衛に采地三千五百石を授ける。(源姓三宅氏中興家伝・天草史談6より)

慶長 五年(1600) 関ヶ原の戦い。

この戦いの前、細川ガラシア、石田三成の捕虜となることを拒み自裁。

慶長 八年 (1603)

この年 肥前唐津城主寺沢志摩守広高、関ヶ原の戦功により天草を加増され、その兼帯所領とする。検地して総高四万二千石(内五千石は、桑茶、塩浜、網運上加算)、本領八万一千石(内二万石は、添地薩州出水郡一円加領)と、合わせ十二万三千石となる。よって志岐崎の突端袋浦、又の名留岡を富岡と改称し、ここに新城(臥龍城)を築き、城下町を構える。

この年、初代番代として領主寺沢広高の甥寺沢熊之助が富岡に入部する。城詰めの士卒1000人を常備して、軍令を布き、郡内主要の地三ヶ所に郡代を置き、各村の庄屋を監督させ分治をする。

郡代 河内浦(後の一町田)

中島与左衛門 (五百石)

本戸

九里三左衛門 (五百石)

栖本

石原太郎左衛門 (七百石)

同副役・大矢野

古野与一 (三百石、足軽10人)

各郡代に、足軽20人を付ける。

各郡代とも、本藩より家族同伴で着任し、交代なく終始勤続する。

当時 領主広高は、天草のキリシタンに対しては、蔭に黙認していた。ただし、教勢は頗る振るわず、ただ惰性を保つのみ。

慶長 九年 (1604)

この年 領主広高、郡中20ヶ浦に船手の常備を命じ、飛船、曳舟等不時の公用に使う。

慶長 十年 (1605)

富岡臥龍城が竣工する。大手門の両翼に戸止口、浜口の二門を持ち、湊内船津の舸子町、権現山麓御徒町等、外郭も整備する。

この年、富岡番代が矢張領主甥戸田又左衛門と交代する。

この年、広高、幕府の意を慮り、番代に命じ郡内所々の天主教寺院を壊し、十字架を倒し、禁教を強制する。そのために、志岐、上津浦の司教館のみ残存し、パードレ5人、イルマン2人在住するのみ。

慶長十一年 (1606)

富岡城郭内の町並みに、各郡代屋敷を建てる。

慶長十三年（1608）この年、富岡番交代、三代目より家臣を登用、高畑忠兵衛（千石）着任する。

慶長十四年（1609）この年、広高に次男生まれ、忠高と名付ける。

慶長十七年（1612）この年、広高の長男忠清が17歳になり、薩摩島津家の女と縁組になり、薩摩より結納の使者伊勢平左衛門が唐津に来る。

富岡番代高畑忠兵衛、新たに大矢野柳浦に茶屋を建て、伊勢の帰途に招いて饗応する。席上伊勢酒癖を発し、寺沢家を悪しざまに罵詈雑言する。これに対して忠兵衛一刀のもとに伊勢を切伏せ、即座に切腹する。

高畑の遺骸は富岡城内清円寺に葬る。

慶長十八年（1613）この春、四代富岡番代として、川村四郎左衛門（千石）着任する。

十二月、富岡番代川村四郎左衛門、下命により天主教徒の検挙に着手。宣教師に退去を命じる。このため、上津浦駐在のイルマン、ママコスこの月に未鑑の書を残して去る。

慶長十九年（1614）一月、諸大名、幕府の命を奉じ、領内の天主教徒の禁圧にかかる。

富岡番代川村四郎左衛門は引き続き教徒弾圧に専念する。志岐の会堂を破壊し、パードレ、ガルシア・ガルセスに退去を命じ、かつ袋浦（富岡）のアダム荒川を捕え、過酷な拷問を続ける。六月六日、この日早朝、アダム荒川を志岐の刑場で首を刎ね、死骸を海に投じる。荒川60歳。広高、江戸より駿府に至る。

家康、国に帰り長崎奉行長谷川藤広と共に、耶蘇教徒の追放を命じる。

広高、文禄四年以来、唐津本領の添え地として領有していた薩州出水郡一円を、当時上がり地のままにあった福岡黒田藩の旧領怡土郡と替地することを願い出て許される。

元和 元年（1615）富岡番代川村四郎左衛門、なおも教徒迫害の手を緩めず、さらに上津浦の教会堂を破壊し、留守

居の住持（一向宗僧侶）を退去させる。

富岡番代更迭。家老職筆頭の関主水（三千石）を据える。これは、長崎や薩摩に備えて、大物を配置するためである。

大坂夏の陣。豊臣氏滅ぶ。

元和 二年（1616）徳川家康死去。75歳。

松倉重政、島原城主となる。

富岡番交代。家老格中村藤左衛門（二千石）着任。

元和 六年（1620）広高の嫡男、忠清早世。25歳。富岡番代中村藤左衛門殉死する。

遺骸は富岡城山内龍服寺に葬られる。

元和 七年（1621）この年、七代富岡番代として、三宅藤兵衛（千石）着任する。

元和 九年（1623）この年富岡番代三宅藤兵衛、縁あって松山外記が遺子貞重を母子とも引き取り、母は富岡町役人

（後の町年寄）田中半左衛門に再嫁せしめ、貞重のみ手許に置いて養育する。

（註）松山外記 元有馬藩士、この年三歳の一子貞重を遺し病没する。

寛永 元年（1624）広高の嗣子忠高、16歳に達し元服、名を堅高と改める。

唐津藩主寺沢広高、將軍家光の意図するところを聞きし、富岡番代に領内キリシタン宗徒の取締りを厳にさせる。

寛永 二年（1624）廣高隠居し、堅高家督を継ぐ。藤兵衛、賀義言上のため唐津へ渡り、伺候する。同時に、番代永

勤に任ぜられ、家族を伴い富岡へ帰る。

寛永 五年（1628） 藤兵衛、唐津本藩よりの招きに応じ、キリシタン禁圧のため帰藩する。

寛永 六年（1629） 藤兵衛、唐津より帰任。途次長崎奉行とも諸事談合、断固弾圧の臍を固める。帰城するや直ちに

三郡代を呼び、各々村役に強制の手段に出るよう特命する。

七月、切支丹禁圧、この月より大々的検挙迫害に着手する。

まず富岡志岐より始め、町役人トマス用左衛門の子ドミニコを流罪に処し、志岐教会堂の門番ジュリオを海に投じる。また富岡志岐の婦女子二百数十名を投獄し、その親や夫に棄教を迫る。

河内浦の郡代に於いては、信徒の子供たちを竹籠に入れ、雨日に晒し、断食三日に及び、その一家に棄教を迫る。さらに、検挙の網を拡大し、迫害の手は大江、崎津に及ぶ。これは軒並みに臨検を強行、否応なしに棄教させる。

一月に来島のパードレ2人も、迫害に及び退去する。

寛永 七年（1630） 十一月十六日、島原藩主松倉重政死去。勝家就封。

藤兵衛、教徒收容のため、富岡郊外野中に牢獄を建てる。

この年も、キリシタンの迫害は峻烈を極め、諸所に悲惨な殉教者を出す。

寛永 八年（1631） 長崎に於いて、温泉岳の熱湯に代えて、海岸に大釜を据えて潮湯に硫黄を混ぜて釜ゆでにするなど虐待が続く。

寛永 九年（1632） 徳川秀忠死去。54歳

十二月九日、加藤家に替り、細川忠利熊本城に入る。

この年、富岡町役人トマス用左衛門の妻及び下男ヨハネ、生きながら身に投ぜられる。

寛永 十年（1633） 先の領主、広高死去。71歳。

志岐の牢舎で、宅嶋六兵衛、火あぶりの刑に処せられる。

寛永十四年（1637）天草島原の乱勃発。藤兵衛手勢百人を率いて本戸へ出陣、同地の郡代屋敷に入る。

十一月二日、藤兵衛、島子へ向かい、尖兵を配して上津浦勢の抑えに備え、即日引き返し、本戸付近のキリシタン検挙にかかる。

十一月十一日、前日富岡に着船した唐津勢が本戸に回航し、三宅勢と合体する。藤兵衛、諸将に会い、諸般を打ち合わせを行う。

十一月十四日、藤兵衛、本戸広瀬で戦死する。57歳。

寛永十五年（1638）二月、原城落ちる。

寛永十九年（1642）三宅藤兵衛の長子藤右衛門重元、故あつて唐津を退去、筑前瀬高村に浪居する。

寛永十九年（1642）重元、熊本藩主細川光尚の招きにより、肥後高瀬に来る。

正保二年（1645）重元、肥後藩に出仕。

（註）天草一揆（天草島原の乱）については、別紙参照。